

精神分析的コラージュ理解の試み

— デイサービス利用の高齢者を対象に

井上裕子

A Trial of Psychoanalytic understanding Collage — Targetting of the Old using day-care center

Yuko INOUE

【要旨】本研究は、コラージュ継続製作における内的な自我の動きを読み取ることを精神分析的に行うことを目的とした。デイサービスを利用する高齢者を対象に2週間に1回、全12回のコラージュ継続製作を実施し、その作品と製作後に個別に生育歴や、現在の生活状況などについてのインタビューを行い、精神分析のオリエンテーションを持つ精神科医らと合評会を実施した。その結果、コラージュを作成する過程に、自我の動きが見られ、生育歴などから利用者の全体像を見出し、これらの知見で、コラージュ完成作品の過程を見ていくことで、よりクライアントとのイメージの世界や内的体験に沿った理解に役立ったと思われる。

I はじめに

わが国は急速な少子化、高齢化の進展に伴い21世紀半ばには国民の3人に1人が65歳以上の高齢者という、超高齢社会を迎えようとしている。高齢人口は平成15年に2431万人に達し、総人口の19%を占めている(総務省統計局推計、2003)。

私は平成13年度よりケアマネージャーとして高齢者と関わってきた。その中で、高齢者は思考や行動の面で、柔軟な考え方を持つことが難しい人が多いと感じた。そのため本来適切であるだろうと思われるサービスの利用を受け入れられず、そのまま問題は放置され、健康、生活状態が悪化していくケースがある。高齢者が生き生きとした生活を取り戻すためには、どうすればよいのだろうか。

II 問題

1. 高齢者の心的過程

高齢者の多くは、社会的役割の喪失に直面し、残りの人生の過ごし方にどのような価値や意味を見出すかが、老年期の課題になる。

“エリクソンは、老齢期の心理・社会的発達課題が

「自我の統合性／絶望」であるとしている。自分自身の肯定的側面と否定的側面の両面を統合することができれば死をも受容していくことが可能となるが、統合に失敗した場合、自分の人生を無意味なものとしか感ぜられず、深い絶望や嫌悪感におそわれる。また、以前の発達課題も高齢期にふさわしい形で再統合されねばならないため、高齢期はいわば人生の総決算を求められる時期といえる(鑑、1998)。”としている。自我の統合に向けて高齢者とのかかわりを深めていくことによって、よりよい自我の統合が可能になっていくのではないだろうか。

2. 表現療法について

老年期にも積極的な活動が可能であり、上手にプロセスに適應するだけでなく、さらに一歩進んで、若い世代と同じように生産的な活動をしながら老年期を過ごすことを目標とすることが大切である。

デイサービスでの活動の中で、色々な表現療法が取り入れられており、自己を表現することによって柔軟なパーソナリティになることが期待されている。

芸術療法は、“支持的な環境で、多様なアートーム

ーブメント・描画・絵画・彫塑・音楽などを用いて成長と癒しを促す。…外界に形を創造することによって、内的感情を表現する。芸術を通して自分を表現することで、感情が解放され、心が澄んで、精神が高揚し、高次の意識状態に至ることができる (Rogers, N, 2000)。”としている。芸術療法の中に、コラージュがある。近年、さまざまな臨床現場において、簡便さと適用範囲の広さにより、コラージュを取り入れた研究が増えてきている。

3. コラージュについて

コラージュとは20世紀初頭に生まれた美術の表現手法の1つである。元々はフランス語で「のりで貼る」という意味であり、写真や絵や文字などを、新聞・雑誌などから切り抜き、これを画用紙などに貼って作品にしていくものである。

中井 (1993) は、コラージュとは“人間の思考・感情・意思・行動は、いずれも2つの方向性がある。すなわち「まとまろう」とする統一方向性と「散らばろう」とする分散方向性とである。精神の存立自体の可能性は、この2つの方向性の揺らぎを伴った動的平衡にある。それによって、統一と分散との統合、すなわち展開 (発展) が可能になる。”

山中 (1990) は、“コラージュの長所として、①台紙、ハサミ、のり、雑誌、などがあればいつでもどこでもできる。②身近にある雑誌などを持ってきてもらう場合はよりその人の内的世界がしやすい。③絵を描くことに抵抗のある人でも導入しやすい。④技術的に簡単なので、幼児から高齢者まで年齢を問わずにできる。⑤知的な作業としてもとらえられるので成人でも抵抗が少ない。⑥表現のあり方によって、その人のパーソナリティや完成、又は病理性や状態像が把握しやすい。”などをあげている。

しかし、そのコラージュにおける解釈について、森谷 (1999) は、“コラージュの標準化された評価法がむずかしい”とし、山中 (1990) も“絵画療法、箱庭療法におけるイメージ表現の特徴として、①言語表現よりの確で具象的である。②集約的である。③象徴表現を取ることがある。④多義的であり、解釈は1通りではない。”と述べている。

4. 精神分析的な理解について

本研究では、精神分析的にコラージュ作品の理解をしていくことを試みたいと考える。しかし、精神分析

的にコラージュを見ている研究は、今のところあまり見当たらない。Greenberg & Mitchell (1983 横井 2001) は、“精神分析とは、そもそもその本質として、解釈的な学問である。…精神分析の諸理論は、患者の自分自身についての説明に欠けている次元を補充することを目的とした、解釈的な説明の可能性を提供するものである。”としている。意識というものは、層状になっていて、意識・前意識・無意識の3層に分かれる。かつ、無意識の中にもさらに層があって、浅いレベルとか、深いレベルからの心象がさまざまに表現される。したがって、表現された作品を理解するときどのレベルからの表現であるのかを把握する必要がある。それは、夢の理解と共通のパターンである。

コラージュ作成するために選びとられた素材1枚1枚は何らかの無意識的な選択が入り込んでいると思われる。たとえ、そこに意識的な選択が行われた場合にあっても、無意識的なイメージ選択をしていると言える。

コラージュ作成時に、採用されるイメージは、切り離されて集められている素材と、自らの内から湧いてくるイメージとが互いに呼応しており、それは無意識的な作用である。

このような作業によって、作者は過ぎ去った過去の忘れていた出来事や感情を想起し、安定した状況の中で追体験をすることによって、新たな感情を生み出し、体験の再統合を行うのである。

作者のコラージュ作りの作業を通して行われる精神活動は、上に述べたようなことであるが、個々の作品間の意味を、精神分析家によって分析的解釈を行うことによって、作者の変化過程を見ていくことができると考える。つまり、自我の統合といった老年期の発達課題が、どのようなものかをみていくこととしたい。

III 目的

本研究では、デイサービスを利用する高齢者に、継続的にコラージュを実施し、その継続して作成した作品の中から老年期の統合の過程に向けての変化が見られるか、意識的な世界だけでなく無意識的な世界を精神分析的に読み取り、事例検討を行う。

研究方法

対象者 デイサービスを利用している高齢者で、やり方を理解し作成できる人に実施した。 **対象者年齢** 約65才以上 **期間** 2006年3月～9月

手続き 二週間に一回のペースで、計12回を、13～15時の間に約1時間程度実施。

コラージュの実施要領 コラージュを実施する際の留意点として、①集団で一斉に開始し、個別作成する。②はさみが使える人は、自分で雑誌から自由に切り取る、マガジン・ピクチャー・コラージュ法で行う。③はさみを使うことが困難な人は、コラージュ・ボックス法やマガジン・ピクチャー・コラージュ法をスタッフと一緒に切り貼りの援助を得ながら行う。④利用者が中心となって実施し、介護者はサポートという形で行う。⑤作成後テーマなど、コラージュ後アンケートを行い、ポジティブな言葉で研究者は感想を述べる。

使用用具 コラージュ実施にあたって、ハサミ、のり、台紙（白画用紙 B4）、素材（雑誌・カタログなど）を使用した。その他に切り抜きを箱に入れて用意したり、切り抜きなどを持参してもらう。 **教示** 「雑誌などから自分が好きなところや気になるところを切り抜いて画用紙に好きなようにのりで貼ってください。難しい方はお手伝いします。」 **コラージュ作成後アンケート** コラージュ完成後に、スタッフの聞き取りにより、作成後アンケートに回答してもらう。 **個別面接** 半年間のコラージュを終了し、6回以上参加をした人、約20人に対して、個別面接を行った。①生育歴 ②生活状況 ③今までに印象的な出会いと別れ ④影響を受けた人・どんな人か・どのようなかわりだったか ⑤家族構成 ⑥既往歴 ⑦コラージュの感想などについて ⑧個別面接の際に、書面と口頭で、研究目的や個人情報取り扱いについてインフォームド・コンセントを行い、同意書を取り交わした。

IV 結果

本研究では、今回のコラージュ実施にあたって、時系列で変化を見ていくために、12回全部に参加し、コミュニケーション可能で、個別面接によって情報収集ができた人の中から1人を選んで分析を行った。その分析は、精神分析のオリエンテーションを持つ精神科医4人と指導教官、大学院生数人とで合評会を複数回行い、意識的・無意識的に表現されている作品について、半年間の変化や個人像を精神分析的に理解、あるいは解釈し、それらを筆者がまとめたものである。

事例

事例紹介 Aさん、89歳、女性。

要介護：1、**日常生活自立度**：J2、**認知症自立度**：I、**利用回数**：週4回、**利用目的**：閉じこもり予防・生きがいづくり **既往歴**：膀胱を手術した。甲状腺を手術して長い間苦しんだ。骨粗しょう症、膝痛の

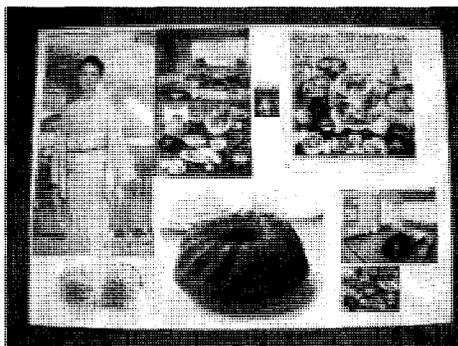
ため治療。左義眼。白内障か何かの病気で、片目だけは助かった。 **印象的な出会いと別れ**：なし **影響を受けた人・どんな人か・どのようなかわりだったか**：なし。なりゆきで、流れにそって生きてきた。 **家族構成**：夫の連れ子2人と実子3人。夫は肝臓の病気で急に意識不明になり亡くなった。長男家族と住んでいたが、長男は10年前に亡くなり、現在は嫁と孫娘と三人暮らし。 **生活状況**：原爆手帳のお陰で思うように治療できるのでありがたい。飲み薬はもらっている。食事は配食サービスを頼んで、自分の部屋で1人で食べている。以前はお嫁さんがおすそ分けをくれたりしていたが、ここ1～2年はお嫁さんが食事をくれなくなった。 **生育歴**：両親は小さい頃に離婚した。父親に引き取られて、その後、全く他人に引き取られた。育ての親は、貧乏ながらも大事に育ててくれた。生みの母には1、2回会ったけどお母さんという感じはしなかった。若い頃は、織物工場で田舎（B島）で働いた。24歳の時に結婚してC町（爆心地より3.5キロ）に来た。連れ子がいることが分かって嫁にきた。主人はお酒が好きで短気な人だった。最後死ぬ前に「すまなかった」と言っていた。仕事は牡蠣・のりの養殖をしていて手伝っていた。初めに建てた家は長男の家にした。長男が死んで今は嫁名義になっているから、自分の財産は何もない。老後が心配。嫁と一緒に住んでいても一人暮らしと一緒。病気になったら行く所があるのか不安になる。自分の人生は最悪で、不幸せだった。

印象：Aさんは、全12回参加し、マガジン・ピクチャー・コラージュ法で作成していた。作成中は、「いやだ、こんなのしたことないからやりたくない。」とスタッフに言いながらもやっていた。かまってもらいたい様子で、スタッフにいつも横に座ってもらい、なだめられながらコラージュを作っていた。甘えた印象だが、芯はしっかりした様子である。手先はとても器用で、ディサービスでの手芸などの活動にとっても意欲的である。

各回コラージュ後アンケートの内容は、以下の番号で省略して表記する。

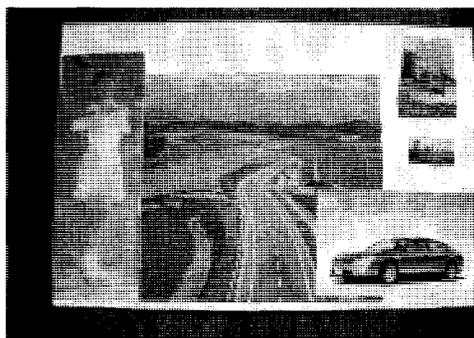
①作品にテーマをつけてください ②作品の感想・こだわったところ ③作品に額縁をつけるとしたらどんな額縁をつけますか ④その額縁は好きですか（好き・嫌い・どちらでもない） ⑤作品に集中できましたか（できた1～5でできなかった） ⑥作品の満足度（満足・まあまあ・不満足） ⑦100点満点中何点ですか

第1回目（4月13日）



①旅 ②食べるものばかり集めた ③空色、四角、紙テープ ④どちらでもない ⑤1 ⑥満足 ⑦50点
 〈作品の印象および理解〉全般的にこの作品は、母親的な世界を連想させる。圧倒的なケーキと、華やかな御膳を表現することによって、逆に自らの老いを打ち消そうとする思いが語られている。それは、まさにAさんにとっての、喪失感を示してしまっている。

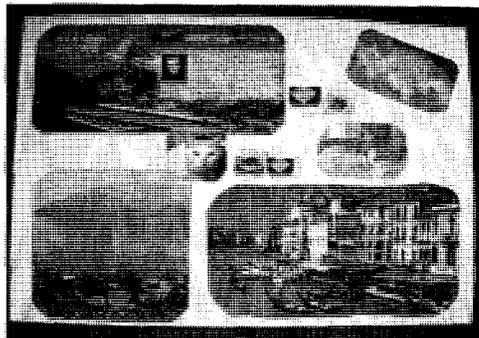
第2回目（4月27日）



①ドライブ ②変な感じ ③青色、四角、木 ④どちらでもない ⑤3 ⑥まあまあ ⑦30点
 〈印象・理解〉1回目の作品と比べると、華やかで自分の欲求が画面いっぱいに表示されているのとは対照的に、孤独・寂しさが描かれている。こういう変化が、無意識的に表現されるAさんのこころの動きであろう。ある意味では、はしゃぎすぎた後の反動とも言える。

第3回目（5月11日）

①旅 ②夢でもいいから行きたいところを作った ③シルバープラスチック ④どちらでもない ⑤できた ⑥まあまあ ⑦60点
 〈印象・理解〉1回目のあふれんばかりの欲望の込め



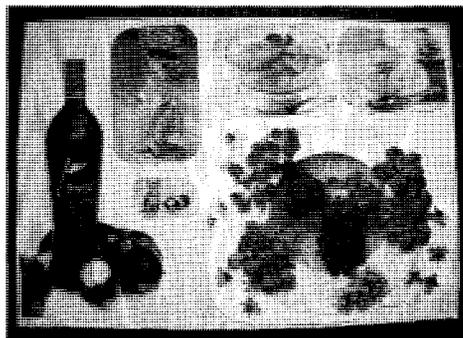
られた作品から、2回目はその反動で、誰一人いない殺風景な作品となった。そして、この回は、2回目の道の延長線上の旅というテーマが語られている。自分の思いは猫に託されている。

第4回目（5月25日）



①自然 ②四季 ③四角 ④どちらでもない ⑤1 ⑥満足 ⑦75点
 〈印象・理解〉作者にとって、最も充実した時期の喜びが表れている。この作品を作ることによって作者は活力を得ているようである。

第5回目（6月8日）

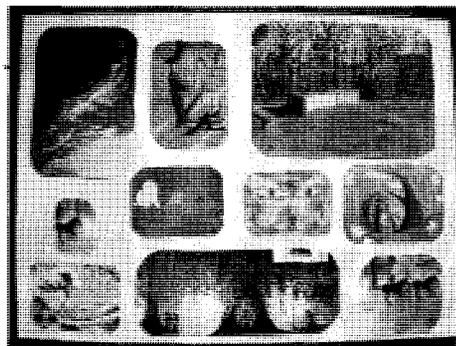


①空想 ②色味こだわりました ③黒、木、四角 ④

どちらでもない ⑤3 ⑥満足 ⑦90点

〈印象・理解〉前回の作品と比べると、色彩やバランスも取れているが、豊かな自我の世界から欲求や衝動の世界へと退行している感がある。

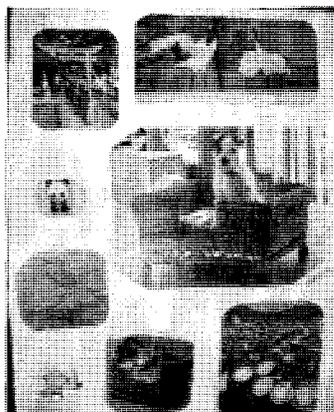
第6回目（6月22日）



①芸術の森 ②題名を考えるのに頭を悩ませています
③銀の金属、四角 ④どちらでもない ⑤1 ⑥まあまあ ⑦50点

〈印象・理解〉前回、前々回と比べると、作者の影の部分が表現されている。心寂しく、冷たく、ひんやりとしている。角を丸めていても、その中は柔らかさに欠け、人をよせつけない拒絶感が込められている。

第7回目（7月7日）

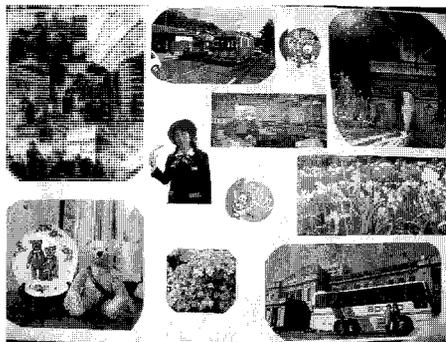


①田園風景 ②出来上がって安心した ③丸い額縁、木、青色 ④どちらでもない ⑤3 ⑥まあまあ ⑦50点

〈印象・理解〉珍しく、大勢の人が登場して活気に満ちてはいるが、そのまわりに点在する動物は、一人寂しくたたずんでいる。このコントラストが、作者の無意識的な思いを表しているのだろうか。ディサービス

に来ると、にぎやかな中に入るが、それを終えて家に帰ると、1人ぼつんとしてしまうさまが表されている。

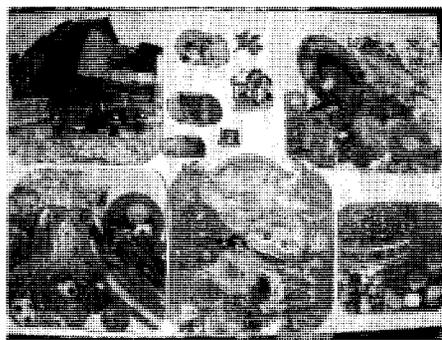
第8回目（7月20日）



①バスの旅 ②きれいな風景 ③黒、四角 ④どちらでもない ⑤1 ⑥まあまあ ⑦50点

〈印象・理解〉6回目、7回目と異なり、再びまとまりのある画面構成となっている。中央にバスガイドが置かれていて、まるでそれぞれの素材を説明し、まとめているような構図となっている。バスガイドという表現からは、自分の分身と同時に、誰かにしっかりリードしてもらいたいという、淡い期待も感じられる。子グマは、作者の失った長男を表しているように見える。失った悲しみよりも、長男を誇らしく自慢にさえ思っているようでもある。

第9回目（8月3日）

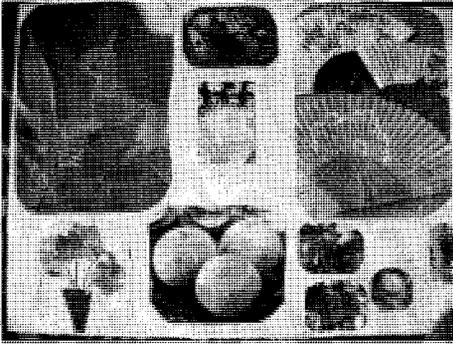


①海水浴 ②海水浴、水遊びにこだわった ③水色、四角、プラスチック ④どちらでもない ⑤1 ⑥満足 ⑦50点

〈印象・理解〉8回目で、情緒豊かな作品を作ってエネルギーを手に入れたためか、その延長線上の子どものようなはしゃいだ作品が作られている。所狭しと貼

られている遊具からは、彼女の異常なまでの執着が感じられる。この執着は、両親と別れ継父母に育てられた作者の親に対する依存や甘えたい気持ちの投影ではないだろうか。

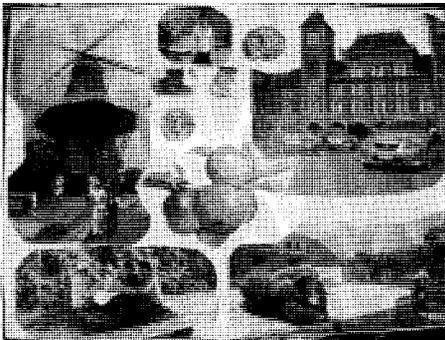
第10回目（8月17日）



①夏 ②まあまあ ③なし ④なし ⑤3 ⑥まあまあ ⑦80点

〈印象・理解〉前回の退行した子どもの海水浴という風景から一転して、しっとりと落ち着いた静の世界が表現されている。全体的にしっとりとした大人の世界を表している、前回の同じ「夏」というテーマでありながら、好対照を成している。このような変化は、前回十分に子どもの世界を表現できたことにより、もたらされる作者の成長と考えられる。

第11回目（8月31日）



①旅 ②あこがれ、いけないから行きたい ③青色、木、三角 ④どちらでもない ⑤1 ⑥まあまあ ⑦70点

〈印象・理解〉右下の象は、動物園で世話を受けている様子で、自分は受身的でディサービスでのスタッフに依存し、指導してもらうことで、余生を送りたいと考えている。全体的に見れば画面の中に登場する人物

が次第に増えている。これまで積み重ねたコラージュ作成の作業の中で、自分というものを振り返り、孤独な人生を送ってきただけでなく、スタッフとのつながりや、夫婦、家族とのつながりを感じながら生きてきたということを再認識したような喜びでもある。

第12回目（9月14日）



①秋 ②いろいろな秋をみつけた ③黒 ④どちらでもない ⑤2 ⑥まあまあ ⑦65点

〈印象・理解〉この作品は、右下の2人の子どもの存在が際立っている。満足感をこの作品を見るものに訴えかける力がある。作者のこれまで作成してきたコラージュ作りの喜びや達成感を表しているのである。船に乗ろうとする人物を近所の猫が見送っている。コラージュ作りが最後日であり、意識的か、無意識的か、別れの情景を選んでいる。作者はコラージュを作る事によって、望外の喜びを得たと告白しているようである。

考察と今後の課題

本研究では、ディサービスで高齢者を対象としたが、体調不良やショートステイの利用のためにディサービスの利用を休んだり、死亡のため利用を終了するなどの理由で、継続的に作成していくことは難しかった。また、スタッフのモチベーションは、全体のコラージュに対する関心度にもいくらか影響したため、その都度説明を加えたり、勉強会を開くなどして、全体のモチベーションを上げていくことが必要であった。今後の課題として、コラージュを継続的に進めていく上でのスタッフへの教育プログラムを検討していくことが上げられる。

今回の研究では、参加作者の自我の状態を継続して見ていき、どのように統合への変化過程がみられるか検討していくため、12回全部に参加し、個別面接で情報がとれた人3人の中で、自我の統合への過程がよ

り見られたのではないかと思われるAさんの事例をとりあげることにした。Aさんによって表された作品から読み取れる自我状態は、その変化過程の中に、統合への意欲が込められていることが理解される。

1回目で口唇期的欲求が表現されたので、2回目はその反動として自我異和的に自己と距離をとり、孤独で寂しい世界を表現している。このように自己との距離を調整しながら、作品は作られていった。3回目は、前回で自分との距離をとって、ひとりの世界を表現したため落ち着きを取り戻し、また少し自己の欲求や願望が表現されている。4回目には、また思春期の頃を振り返るような躍動感あふれる少年、少女が登場する。そうやって、人物が再び登場すると、また5回目に口唇期的欲求に返っていく。しかし、どんとケーキが出るのとは違って、色彩よく装飾がほどこされて、上手に自分の欲求を表現できるようになっている。ところが、6回目はどこかバランスをくずしてしまい、まとまりのない細分化された世界に沈み、空想の世界で遊んでいる。これは一種の逃避行であろう。その傾向は続き、7回目もまとまりの乏しい、部分に分かれた作品となっている。ただ、前回とは違い、2羽の鶴の登場で夫婦の感覚が甦ったり、存在感のある犬が登場したり、大勢の人の棚田祭りや神社のお祭りが表現されることによって、徐々に自我の回復を図ろうとしている。そして、8回目に至り、バスガイドという人物を中心にさまざまな情景や風景が結び付けられている。ティピアの子ぐまは、作者のこころの中にある、息子への思慕が表現されていると思われる。9回目は、8回目のエネルギーを得て、一段と退行し、幼児期の満たされなかった部分への思いを作品に思いきり投影している。4回目に出てきた少年・少女よりもはるかに幼い幼児期の思いにこころが向けられたのであろう。そうやって、子ども返りするごとに、落ち着いて安定した気持ちを得ていくのであろうか。10回目は、静かで成熟した伝統文化や、熟した果物、あるいは青葉などで、作品が構成されている。11回目の作品は、1回目のケーキを思わせる、熟したりんごが描かれているが、むしろ8回目のバスガイドの構図に近く、それぞれの素材の特徴を生かしながら、全体をまとめる働きをしているように思われる。ひざを曲げて座っている象は、まさに作者の気持ちを彷彿とさせるものである。12回目は、2人の児童に表れているように、作者のコラージュ作りへの満足が投影されているのである。Aさんは、評者たちが理解するほどには、自己

理解が進んでないにしても、内的なプロセスの中で、ひとつの仕事をやり終えたという達成感を抱いていると思われる。

このように、全12回の作品を振り返ってみると、口唇期欲求が表現されたかと思うと、それへの反動が表れ、影を潜めたかと思うと、また徐々に首を覗かせということを繰り返しながら、エスと自我および超自我のバランスを図る作業となっている。Aさんは、実に見事にその作業をやったのけたのである。それぞれの作品の中で語られている意味を読み取る作業と、12回のシリーズとして全体の流れの意味を考えると、Aさんの自我の統合は、幾分かは図れたと理解する。

Aさんは、コラージュ作成中も「私は駄目だ。出来ない。」などの言動が多く見られたが、芯の強さのようなものも感じていた。Aさんは、ディサービスのスタッフから、とても良い関わりをしてもらえており、そのようなスタッフに支えられたことは、Aさんがコラージュの中で安心して自由な表現ができる環境となり、今回の変化にもつながったのではないかと思われる。全12回コラージュ終了後の個別面接では、「こんなこと（生育歴について）誰にも言えなかった。あなただから言えたのよ。ありがとう。」という言動も見られ、コラージュを通して自由に表現する作業を繰り返して行ったことによって、内的にあるものの言語化がより進んだのではないかと思われる。

今回、コラージュ完成後に、額縁をつけるという新たな取り組みも行った。枠についての研究もいくつか行われており、今回の研究においては、作品にまとまりをつけ、内的心性の表出の促進にいくらか役立ったのではないかと考えるが、はっきりとした効果を今回は述べることはできない。枠の効果についても今後明らかにしていきたい。

今後は、さらに多くの事例を集め、精神分析的な理解を深めていくことが必要である。

また、得られた結果をどのようにフィードバックしていき、さらにより深い洞察が得られ、適切に統合していけるような関わりについては、これからの課題にしたい。

謝 辞

本研究のコラージュに、御協力頂きました、ディサービスあゆみ、ディサービス幸せ物語、ディサービスツクイの利用者様、スタッフの方々に心より感謝申し上げます。また、コラージュ研究会でご指導頂きまし

た県立広島大学教授の山本映子先生、お忙しい中、コラージュ合評会で、ご指導・ご助言いただきました、浅田病院院長の浅田 護先生、加茂精神医療センター副院長の坂尾良一先生、松田病院院長の松田文雄先生、若宮クリニック院長の若宮真也先生、本論文作成にあたり、御指導頂きました、塩山二郎教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

Greenberg, J.R., & Mitchell, S.A (1998). *Object relations in psychoanalytic theory*.

Published by arrangement with Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts.

(グリーンバーグ J.R. & ミッチェル. S.A. 横井公一 (監訳) (2001). 精神分析理論の展開 — 欲動から関係へ ミネルヴァ書房 18-25.)

森谷寛之・杉浦京子・入江 茂・山中康裕 (編) (1993). コラージュ療法入門 中井久夫 コラージュ私見創元社 137-146.

森谷寛之・杉浦京子 (著) (1999). 現代のエスプリ コラージュ療法 至文堂 51-58.

中井久夫 (1985). 中井久夫著作集 治療 岩崎学術出版社 177-179.

Rogers, N (1993). *The Creative Connection: Expressive arts as healing*.

Japanese translation rights arranged with Science & Behavior Books through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

(ロジャース, N. 小野京子・坂田裕子 (訳) (2000). 表現アートセラピー 誠信書房 4-5.

総務省統計局推計 (2003). 高齢人口の推移 総務省平成15年10月1日

<http://www.pref.toyama.jp/cms_cat/104030/00001226/00069824.doc> (2007年1月1日)

鎌幹八郎 (2002). アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版 376-377.

鎌幹八郎・一丸藤太郎 (監) (1998). 精神分析的心理学療法の手引き 誠心書房 161.

種村李弘 (1993). エルンストの擬挽 ユリイカ臨時増刊 8-17.

山中康裕 (編) (1990). 描画および箱庭表現にみられる不安 精神看護 16 9.